

文章の理解と記憶 (024~029)

座長 梅村智恵子・国分 振

- 024 照合課題における文の符合化特性について
富山大学 梅村 智恵子
- 025 パラドクスの理解と文の記憶・主語探し課題
お茶の水女子大学 糸井 尚子
- 026 文章問題の解決におけるスキーマの利用と誤り手順の分析
宮崎大学 吉田 甫
- 027 スクランブルド・ストーリーの理解過程
東北大学 国分 振
- 028 文の理解と記憶におけるリハーサル効果
東京学芸大学 〇須藤 貢明
筑波大学 保坂 真理
東京学芸大学 佐宗 俊久
- 029 物語のもつカメラ・アングルの記憶について
国立教育研究所 上野 直樹

質疑応答・討論

糸井(025)に対して、上野(国立教研)から、パラドクス課題も、別の文脈の発見(例えば、村に床屋が2人いた)によって、パラドクスではなくなるが、こうした理解をどう扱ったかとの質問があり、糸井は、そのような事例もごく少数あったが、正答とは分類しなかったと答えた。同じく上野から、パラドクス課題を解決し得るために何が必要か?パラドクス課題にリカーシブ・ストラクチャが含まれているかどうかといったようなモデル構成なり、課題分析をしないと、主語探し課題などとの関連がなぜできたりできなかつたりするか説明ができないとのコメントがあり、糸井は、きちんと定義された手法で課題文を記述するアプローチが必要であると答えた。糸井はさらに、国分(東北大)の、「情報処理の場の分化」とは何かとの質問に、チャンクを作るという回帰の度合いのことであると説明し、また須藤(東学大)の、情報処理の場ということばの「場」ではストレッチのみでなく処理オペレーションも含むのかという質問に、単なるストレッチではないものと考えていると答えた。多鹿(愛知教大)からは、情報処理の場の分化の程度をどのように捉えるかとの質問があり、糸井は、情報処理の場の質的分析から捉えると答えた。

吉田(026)に対して、谷口(愛知教大)から、文章問題を解く過程として、①テキストを読む、②問題の型を見つけるとあるが、この①と②の間に、文章問題の主

題を見つける過程、すなわち、どんな答を出すことが求められているかを理解する過程があるのではないかと、この主題さえ見つけ出せない被験者もいると思われるが、との質問があり、吉田は、文を読むということにはいろいろなレベルがあるので、ここで設定したような過程の分け方にはやや問題があるが、余り過程を複雑にすると外的にも反応して取り出せないのでは6過程にした、と答えた。多鹿(愛知教大)の、実験結果から、能力差が問題スキーマに影響するといつてよいかとの質問に、吉田は、実験結果からはその通りだが、たとえばC₁の選択問題などでは低能力者も高い得点を示していると答えた。

国分(027)に対して、梅村(富山大)より、(1)自然的体制化の中にはSsのストラテジーによる差異があるのではないかと、即ち、ランダム・ストーリーの忠実な再生と、意味の体制化に早く転換するタイプの間の結果に差はないかと、(2)この「自然な体制化」と、意味の再構成を意図的にした「体制化」を比較した場合、体制化のメカニズムに差異があるか否かの質問があり、国分は、(1)については、教示の受けとり方に差異があつて、忠実な順序の再生が課題であると思ひこむケースもあり、その場合はその方向の達成を示すこと、(2)については、体制化を意図的、無意図的と二分することはむずかしいが、何れにせよ意味だけではなく、表現上の手がかかりも利用されることを答えた。

須藤ら(028)に対して、増井(名古屋大)より、文と絵の照合は、互いに対応するマイテム間の照合によると考えてよいかとの質問があり、須藤は、必ずしもそうではなく、絵は流れ、概念をあらわしていることもあると答えた。また小石(神戸大)の、文構造が複雑になるとそれを理解するためにリハーサルが必要というが、そこで何が起きていると考えるかとの質問に、須藤は、句単位の、チャンクが大きくなる、そのストラテジーがなければ理解過程はすすまない、命題が認知できるかが問題だ、と答えた。清水(奈良女大)からは、要素の記憶のよせ集め以上のものだという例を示して欲しいとの質問があり、図1を例に説明がなされた。

上野(029)の発表には多くの質疑が集まり、それへの上野自身による応答という形が討論の大半を占めた。佐藤(北海道教大)から、この研究では2~3分のいわゆる one-shot のシーンが述べられた文章が用いられているが、現実の物語の中ではもっと複雑な視点からの内容が連続して出てくるであろう、それにもかかわらず1つのつながりとして理解していくときに用いられる視

点としては、主人公の立場に立って読者がとる視点のよ
うなものが考えられよう、またそうした視点が物語の
理解に重要なのではないかと、との質問があり、上野は、
多くのシーン、episode から成る物語の場合、視点が
動くことは確かだ、その場合、あくまで仮説にすぎない
が、いくつもの視点からのシーン、できごとをバラバラ
に記憶しているわけではなく、個々の視点からの情報を
1つの視点に変換統合するようなことが行われるのだと
思う、たとえば「Aさんが悲しくて泣いているのを見て
Bさんが笑ったのをCさんが怒った」というような埋め
こみ型の物語の場合、最終的にはA、Bの視点からの
シーンの記憶は、Cの視点に統合されていくのではない
か、こうして様々な視点から記述されたシーン、
event を1つのつながりとして理解し得るのではないかと
考えると答えた。堀(長岡短大)の、視点変換に false
alarm が小さいのは、テキスト・ベースの違いなのか、
視点変換 tag がついていると考えるのかとの質問には、
基本的にはテキスト・ベースの違いのためと考えている
と答えた。梅本(京都大)の質問、視点変換文における
再認テストは、純粹に再認のスコアというより、視点変
換に対するセンシビリティをあらわしている可能性は
ないが、あるいはむしろそのようなものとしてとらえた
方がよい場合があるのではないかと、に対して、上野は、
視点変換の検出ルールのようなものをもっているから視
点変換文を検出し得るといふことの可能性はここでは否
定できない、しかし、たとえ視点がそうした一般的なル
ールの形で記憶表象に残っているとすると、本研究の仮
説は支持されよう、もちろん、*「視点」*の具体的な記憶
のされ方を探っていくことはモデルの明確化の意味でも
重要と思われるが、と答えた。堀(長岡短大)の質問、
(1)視点変換文の作成法には「山男のあとを小僧が
ついて行った」という方法もあるが、動詞をかえる方法
をとったのは何故か、(2) ①文と③文は同じ命題とい
う前提がある筈だが、それをまずたしかめて実験をする
必要があるのではないかと、に対して、上野は(1)につ
いては、視点というとき、given-new contract などのよ
うな側面も必要であろう、ただしここでは従来の schema,
script 理論の問題点を指摘することが主な目的であつた
ので、久野の提示した視点の考え方を拡張して採用した、
(2)については、①、③の文を同じ命題とはとらえない、
従来の文章記憶研究(Sacks, 1967など)の見解によれば
同一ととらえられるのだろうが、むしろここではそれを反
証するのが目的であると答えた。清水(奈良女大)の質
問、(1)視点の定義は?例文③が②より視点的というよ

うな次元的なものか、(2)視点の統合の構想は?例文①と③
を同じとみる視点には理解はないといえるか、①と③を
同じとみる視点もあり、ちがうとみる視点を統合するも
のは?に対し、上野は、(1)については、ほぼ久野(1977)、
談話の文法、大修館に従っている。例文③が②より視
点的と述べたわけではなく、②のタイプの語順変換など
の形式変換文でも、何が given か何が new が異なっ
ている場合もあり、そうした意味での視点の変換をより
組織的にコントロールする必要があることを強調した。(2)
については、従来の文章理解の研究では、①と③が全く
同じという見方しかなかったが、こうした流れの中でそ
れは全く片手おちであることを示すために*「視点のちが
い」*の意味を強調した。また、純粹に鳥瞰的な視点から
の理解はあり得ないとは述べたが、そのことと①、③を
同じとみる視点がないかどうかといふことは別の問題の
ように思われる。①、③の視点を同じとみる視点は鳥
瞰的なものといひ切れるだろうか、と答えた。高木(山
形大)の質問、視点変換文として使われている再認テ
スト文は、文そのものの一貫性が低くなっているように
思われる。そのためのデータのゆがみが出ているとは考
えられないか、および梅村(富山大)の質問、例題の
「くくれた、やった」、*「ついて行った、ついて来た」*
の単語*「くくれる、やる」*、*「行く、来る」*の意味とし
ては視点の差異が含まれるが、語用の時点で難点が生
じることがあるのではないかと、1つには、動詞が複
合動詞あるいは補助動詞的に使用される場合は視点の
対照性が稀薄になる場合もあること、第2には、原文
の変形を最少限におさえるために主-述関係あるいは格
助詞との対応において文法的、意味的に矛盾が生じる
ことも考えられることによつて、の2質問に対し、上
野は、例えば語順のみを変えた形式変換文の場合、「山
男のあとを小僧が」にしても、視点変換文と同程度
の不自然さにもかかわらず false alarm rate が高い。
視点変換文の false alarm rate の低さは、*「視点」*
が利いているためと考えてもよからう。もちろん、
コントロールの必要は否定しないが、と答えた。浦上
(都立大)の、問題解決における視点と文章理解にお
ける視点は異なるのではないかと、後者では、書き
手の視点をフォローする受動的な視点ではないかと、
との問いに、上野は、文章理解は、単に作者、話
者の視点を見出すことにとどまらず、それらを手が
かりとして別の視点を、ある許容範囲において、
構成するプロセスの存在も否定できないのであり、
その意味では問題解決における視点の問題と共通し
ていると答えた。(国分 振)